アートギャラリー

奥池の山荘

岡　本　清　文

設計概要

古くから阪神間の閑静な住宅地として開発されてきた芦屋には、苦楽園、朝日ヶ丘、六麓荘などいわゆる六甲山系の麓に形成された高級住宅街とともに、山間地に開発された宅地がある。その代表である奥池町は、自生する松や紫陽花がいかにも日本的な山あいの風景を醸し出す別荘地であり、このプロジェクトは当地に計画された週末の住居である。

奥池町は豊かな自然に恵まれてはいるが、その高度から冬は厳しい寒さとなり、通年非常に湿気が多い。また途方もない落ち葉の掃除や雑草の処理など、自然の中に暮らすということは、都市生活の目線から抱く情緒的なイメージを脱した思いもかけない険しさに遭遇し、それらを確実に乗り超えてゆくことである。初夏や紅葉時の、美しくも優雅な別荘生活だけを思い描いて計画をすると長期の使用に耐えず、数年後には放置されることになる。こういうケースは意外と多く、別荘地に朽ち果てた建物が散在する光景を幾度か見た。

私がまず構想したのは、居住スペースを地面から切り離すことであった。地中から這い上がってくる湿気を直接呼込まないように、緩やかな傾斜を持つ敷地に、シンプルな筒状の空間を地盤から浮かせて配置した。下部構造は耐震性を考慮して厚いコンクリート壁造とし、その上に木の壁で囲まれた居住空間を積み上げるという考えである。木の壁は長さ 6 m×高さ 60 cm ×厚み 20 cm の集成材を、鉄骨柱に貫通して、全長約 28 メートル、高さ 3 メートルに積上げた自立型の大壁面である。新しい木造の可能性を求めた現代的なログハウスとも言える。

吸湿に加えて遮音や断熱など、機能性に富んだ無垢木材の特質を生かして、内外とも材料そのままの仕上げとし、木質本来の表情を全面的に表した。ただ一方で、木の弱点は朽ちることである。瑞々しい木目も、紫外線と風雨に曝されると、すぐに劣化し灰色に変色する。最後までこの問題に悩んだが、近年開発された新技術の採用によって実行に踏み切った。それがガラスコーティングである。従来の塗料は悉く有機化合物であり、有機材は確実に経年劣化を引き起こすが、ガラス塗料は無機質のケイ素成分（SiO2）によって非晶質のセラミックス膜を形成する。つまり紫外線の影響をほとんど受けないのである。厳しい環境と拮抗しながらも、美しい自然に溶け合う建築が誕生した。

■ 計画地　　兵庫県芦屋市奥池町 8 番 16
■ 敷地面積　995 ㎡
■ 建築面積　193.4 ㎡
■ 延床面積　304.5 ㎡
■ 構造・規模　RC、S 造　地下 1 階、地上 1 階
■ 工期　　6 ヶ月　　竣工 2008 年 12 月

写真1．外観全景

写真2．エントランスホール

立地について

立地は建築設計にとって、もっとも根本的かつ重要な与件である。国内外を問わずどこに建てようが、いつも同じスタイル、同じ仕上げ材料の著名な建築家もいるが、私はやはり周辺環境に応じて、柔らかに建築のかたちを変容させることが自然であると考えている。それはすなわち一定のスタイルを作らないことであり、過剰な表現主義に陥らないことである。

この姿勢は私自身が、特徴的デザインを掲げて活動する個人設計事務所（俗に言うアトリエ事務所）ではなく、大組織企業体の中で設計を行なってきたこと。それに加え、世界的建築家であるシーザ・ペリ氏の事務所勤務で学んだ経験に因る。氏の作品は、身近なところでは大阪国立国際美術館や馬場町 NHK、海外では NY の MOMA やカーネギーホールビルなどがある。ジャーナリズムからは、毎回変わる設計スタイルに対して、節操がないとかコマーシャリズムだとか批判されることもあるが、建築主や立地条件が緩やかに建築の姿を形成してゆくという彼の思想には、大きく賛同できる。かれは一定のスタイルを‘aesthetic consistency’と表現し、建築においてこれを否定している。

このプロジェクトに関して言えば、例えば着工前から既に敷地にあった見事な１本の黒松は、この建築の配置やヴォリュームを決定する上での強烈な文脈であった。また敷地ごとに様々な厳しい法的条件がかけられているが、法規制は場に与えられた社会的条件そのものであり、それもまた立地が先天的に保有している環境といえる。それらを、自らのスタイルを完遂するためにねじ伏せるのではなく、外的条件と寄り添いながら、流動的に生まれ出るデザインにつなげてゆく。

写真3．シンボルツリーの黒松との対比

写真4．外壁はレッドウッド集成材（北欧の松材）

景観について

日本にはなかなか定着してこなかった「景観」という概念が、昨今少しずつ意識されるようになってきた。ここ奥池町は法規制を一段と厳しく見直され、かつては企業の研修所、保養所なども建っていたのを一戸建て専用住宅用途に絞り、建ぺい率20％、緑化率40％など、低層で品位のある住宅がゆったりと緑の中に佇む自然融合型の景観を目指している。芦屋市のこの市政は最近新聞にも取り上げられた。更にこの地区が瀬戸内国立公園内にあることから、自然公園法が適応され、屋根の形状や仕上げ材、外装色にいたるまで規制を受けた。つまり外観デザインへの言及である。特に屋根形状に関しては、窓口である環境庁と何度も折衝を行なったがなかなか認められず、半ば苦し紛れに変則的な片流れ屋根を着想したが、結果的にはこのことによって一層量感のある建築になった。

法規制は時に建築家の自由な発想を否定し、創造の可能性を限定するような存在であるが、それをうまく飼い馴らして乗り越えたとき、自己の発想枠を打ち破った強靭な創造性が芽生えることがある。そこには、甘ったるい手放しの自由にはない、“説得力のある美”とでもいうようなものが形成される。

「景観」とは共有財であり公共概念である。従って個人の自由意思や都合、利益とは基本的に相容れないものであろう。その不自由さと、時に理不尽にも思える社会条件を粛々と受け入れない限り、いつまでたってもこの国のかたちは自由と権利の安直な自己表現だけに終始する。海外の目から、あまりの文脈の無さとカオスの状況に対してのみに注がれる賞賛（あるいは驚愕、あるいは失笑）に甘んじているのがわが国の都市文化である。

写真5．初期の屋根案
フラットの片流れは認可されなかった

写真6．自然公園法により、変則的な切り妻屋根とした

写真7．屋根材は天然スレート　結果的に初期案よりボリューム感がでた

写真8．夜景全景

写真9．同上

写真10. 約6mの跳ねだし床　下はワインセラー

写真11. 下部コンクリート仕上げ　杉板化粧型枠

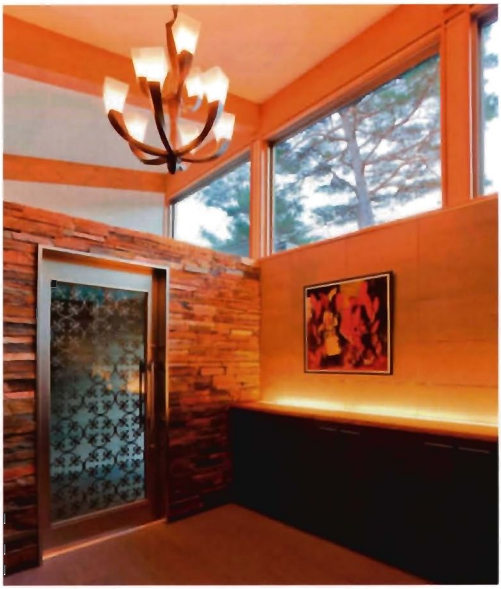


写真 12. 玄関ホール同上

写真 13. 同上

写真 14. 室内全景　内壁も築成材のまま

写真 15. リビング

写真 16. 同上　室内は全て間接照明

写真 17. ベッドルーム

家具デザイン

家具に関しては全てこの建築のために別注したオリジナルデザインである。主な素材にアフリカ産のオバンコールというマメ科の木材を使った。この材は通常は薄くスライスして高級楽器などに突板として使うが、今回は無垢で使用。重厚感溢れる存在である。現物は、深い茶褐色のなかにオレンジ色の斑が散り、宝石のような煌めきを持つ。

写真 18. 洗面所　奥はワードローブ

写真 19. WC　造り付け洗面台

写真 20. ドレッサー　鏡は折りたたみ式

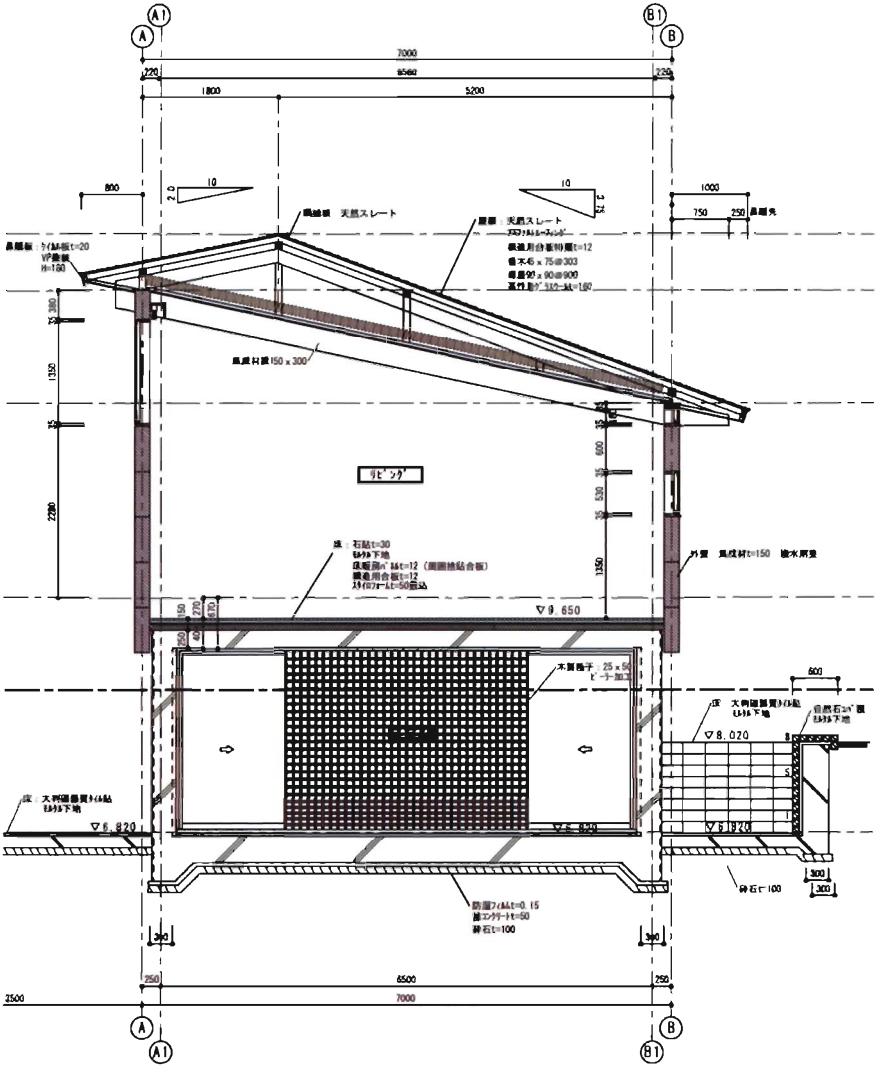
写真 21. 照明器具もオリジナルデザイン

写真 22. 中央多目的家具

写真 23. 空調や床暖房のスイッチ類を天板内に集約

組み立て過程

コンクリート基壇の上に125 mmの鉄骨角柱を2Mピッチで立て、そこに厚み20 cm ×高さ60 cm ×長さ6Mの集成材ブロックを貫通しながら積み上げる。5段重ねで壁の総高さは3Mとなる。ジョイントからの止水が肝要で、2段サネ加工というログハウスの考え方を踏襲した。


A1
B1
A
B
7000
220
6560
220
1800
5200
800
10
2.0
10
2.0
1000
750
250
鼻隠先
鼻隠板　ﾗｲﾑ材板t=20
VP敷設
h=180
鼻隠板　天然スレート
鼻隠：天然スレート
ｽﾚｰﾄﾙｰﾌｨﾝｸﾞ
鉄筋入合板下地t=12
垂木45 x 75@303
母屋90 x 90@900
基礎ﾊﾞﾝｶｰ付t=180
鼻隠付属150 x 300
380
1350
15
2280
15
600
530
1350
リビング
床：石貼t=30
ﾓﾙﾀﾙ下地
床板面ﾌｨﾙﾑt=12（周囲捨貼合板）
鋼板用合板t=12
ｽﾀｯｸﾌｫｰﾑt=50敷込
外壁　風成材t=150　撥水剤塗
▽9.650
150
270
670
250
40
不燃簾子：25 x 50
ﾋﾞｰﾁ加工
600
床：大判磁器質ﾀｲﾙ貼
ﾓﾙﾀﾙ下地
自然石ｺﾝｸﾘ張
ﾓﾙﾀﾙ下地
▽8.020
8
5
1
▽6.820
▽6.820
▽6.020
砕石t=100
300
300
防湿ﾌｨﾙﾑt=0.15
捨ｺﾝｸﾘｰﾄt=50
砕石t=100
340
340
250
6500
250
2500
7000
A
B
A1
B1

断面詳細図